



GISと東京の農業

総務省統計局統計調査部長

須田和博

PTAやILOのようにアルファベットの数文字で表される言葉は昔から多かった。しかし、ICT（情報通信技術）の普及とともにその数は最近になって一段と増えている。PC（パソコン）、CATVに始まり、LAN（ローカル・エリア・ネットワーク）、PHS、ADSL等と枚挙に暇が無い。かつて人気があった漫才コンビと間違えそうなBB（ブロードバンド）というのもある。この種の言葉は、分かる人には説明しなくても分かるが、分からない人には説明しても分からないというものが多い。実際に見ればこういうものだということがすぐ分かるが、そうでないといふら説明しても分からないというものかも知れない。

来年の1月から統計局のホームページで提供を開始する予定の「統計GISプラザ」のGIS（Geographic Information System）もそういう言葉の一つで、GISを既に利用している自治体の関係者にとってはすぐイメージできようが、一般の人にとってはまだまだ分かりにくい。そこで、GISとはどんなものかを説明するために、GISとはこんなものですよということを説明するためのデモストレーション用の画像を、いろいろな統計データを使って作り、機会あるごとに説明するようしている。あくまでデモストレーション用なので、あらゆる地域という訳にはいかず、説明相手の関心を念頭において、特定の地域のデータを個別にGISに打ち込んで作っている。

GISの利用の仕方も、地図上に細分化された区域毎に棒グラフや円グラフを示したり各区域を統計データに従って色で塗り分けたり、あるいは各区域別の人數や企業数をドット（点）で表す方法等がある。このドット方式は、情報容量が膨大になるため、来年1月の「統計GISプラザ」のスタート時点では残念ながら利用できないが、GISのイメージを分かりやすく伝えるのに適当なものとしてデモストレーション用に使うこともある。一度この方法で東京都の産業別従事者数を示す図を作つてみた。これは、東京都の地図を5,495ある町丁字で区切り、各町丁字に居住する産業別従事者数をドット（点）で表したもので、一次産業、二次産業、三次産業毎に一枚の画像になるようにしている。

一つのドットが示す人數を小さく取りすぎると、画面がドットで塗りつぶされてしまいドットの意味がなくなってしまうので、1ドットが示す割合をそれなりの数にする必要がある。例えば、三次産業の場合に1ドット10人で設定すると、23区内はいうに及ばず東京都全体のほぼ半分は真っ黒に塗りつぶされてしまう。しかし、1ドット100人になると色が薄くなり過ぎて濃淡が分かりにくく、1ドット50人位で全体の濃淡が一番分かりやすくなる。二次産業でも同様である。しかし、おなじことを一次産業でやろうとすると、1ドット=50人では地図上何もない状況になってしまう。1ドット1,010人で



も、ほとんど何もない。使っているデータは平成12年国勢調査によるが、この時の東京都の一次産業は27,126人で二次産業1,382,941人の50分の1、三次産業の4,572,511人と比べると100分の1にも満たないのだから無理もない。そこで思い切って1ドット1人、つまり一次産業の従事者が町丁字に1人いれば、その町丁字にドットを一つつけるようにしてみた。二人いれば、ドットが2つである。これでみるとそれなりに濃淡が見える。東京都を東西に3分割した場合の真中の部分や荒川の東側等が比較的濃く、山手線の内側や西側の山間部はほとんど白くなっている。G I Sの良いところは、この様に統計データをより見やすい画像で示すことができることにあり、全国の1次産業従事者割合5.0%に対し、東京都の一次産業従事者割合0.4%というように単に数字で見るのとは違い、より現実のイメージに近づくことができる。たった0.4%しかないと思っていた東京都の一次産業も、このように地図上でみると印象がかなり違う。しかし、それでも二次産業、三次産業などと比べるとどこか寂しい。一つの町丁字にドットが一つ、二つというような地域について思いを馳せてしまうせいであろうか。こういうドットはまた一つずつ減っていくのだろうか等とも考えてしまった。

そんなことを考えていた数日後、寝酒代わりに用いているアウトドア雑誌を読んでいると、このような気分を吹き飛ばすような記事があった。それは、東京都内で産地直売をしている農家を紹介した記事で、いつの間にか住宅地に囲まれるようになった東京の農地を使って、都心にある利点を最大限にいかした新しい試みに取り組んでいる農家の姿をいきいきと映し出している。コインロッカーを活用した無人の販売所、地域の名を冠したブランド作戦、農産物直売マップの配布など、今まで知らなかつた話が紹介されている。東京での農業の難しさもあるだろうが、地域の自治体と一体となって前向きに取り組んでいる姿が描かれている。そこには、産業別割合では・%という統計数字で表されるのとは全く別の表情がある。G I Sの地図上でかなりビジュアルに見えるようになったと思っていたのも一味違う表情がある。何よりも、農業従事者1人1人の顔がみえているし、今の日本に欠けていると言われている元気がある。

統計調査に従事していると、集団全体の傾向に対する関心が強くなる。勿論、このような集団全体の傾向を把握することは、政策立案にとって欠かせない。しかし、集団全体の傾向が把握できたからといって、その内容のすべてを把握できている訳ではない。この当たり前のことを忘れて、集団全体の傾向を知ることですべてが分かったような気になっていたのではないかと、自身の未熟さを省みる良い機会となった。